

新井白石と朝鮮聘使問題

宮 崎 道 生

正徳の際に於ける朝鮮来聘の問題は従来諸先学によつて各方面から探究せられ、もはや特に附加すべき程のものない様であるが、これを朝鮮側の史料をも参照しつつ觀察する時には多少従来の研究に幅をもたせ得る点もあらうかと考へるので、ここに僅か乍ら紙幅を利用して先学卓説の驥尾に附して卑見を申述べたいと思ふ。

正徳度の朝鮮来聘はこれを四点に於て捉入得るであらう。第一は名分論にかかはる復号問題、第二は儀礼上に於ける使節待遇の変更、第三は国家体面の確保という事から発する国諱論争、第四は学問文化の対決を意味する我が学者文人と彼れ使節との交歓、がそれである。而して学界に於て主としてとり上げられた所は大部分第一の復号問題であり、次には第二の待遇変更の問題であつた。併し乍ら客観的に観る時にはそれでよいとして、当時主役を演じた新井白石その人のいふ所によれば第三の国諱論争が最も重大であつたので、かかる意味から吾人は昨秋この国諱論争についてその真相と外交史上の意義とを些か解明した事であつた。^(一)今ここには主として第二の待遇変更の問題をとり上げ、儀礼の實際に就いてではなくその背後にある交際方針や待遇の眼目ともいふべきものについて考察を加へる事とし、これを 一、新井白石の朝鮮観、二、朝鮮との交際方針、三、使節待遇の眼目、の三項に分つて叙述をすすめよ

う。

一 新井白石の朝鮮観

白石が我が古代史の研究に当つて支那・朝鮮の文献を参考とすべきを主張した事は余りにも著名であるが、朝鮮半島が我が国と古来密接な關係を保つて来た以上白石がこの隣邦に深い関心を抱いて来た事は当然で、従つて李朝朝鮮に對して豊富な知識を有してゐた事は疑ひない。殊に自己の意見が容れられて在來の鮮使待遇に大變改を加へる事となり、身を以てその衝に當る事となつたのであるから、朝鮮認識は一段と深められたに相違ないのである。丁度出府中であつた近衛基熙（將軍家宣夫人の父）の日記に依れば、朝鮮使節が江戸に到着する二十日許り前の事として、白石が將軍の參考に資する為に朝鮮申叔舟の著書『海東諸国記』の抜粋并に註釈をつくり、又一種の朝鮮通史ともいふべき『朝鮮歴代考略』をも草した事が知られるのであり（正徳元年九月癸丑二十七日條）、白石が彼国の諸書に目を通した例としては、その著『朝聘応接記』に『経国大典』や『故事撮要』等の名が挙げられて居る事によつても察知せられる。

然らば白石は朝鮮に對して如何なる判断を抱いたか。これを對日關係に於て見る時には、第一我が国に對する猜疑恐怖と不信義、第二我が国に對する復讐心の抱懷、第三清朝牽制の爲の日本利用、であつたとする事が出来やう。第一は、我國の武力とその侵略的意圖とを恐れ疑ふ態度であり、それから必然的に導かれる信義なき態度である。それは彼の使節派遣の際にもあらはれれば、我方からの使者を迎へる場合にも現れたと白石は考へる。壬辰の役（我方にいはゆる文祿の役）に於て我國軍隊の威力を十分に體驗した彼としては止むをえない所であるが、白石の判断に依れば豊臣氏に對しての怨恨を引續き徳川氏にまでむけるのは不当であるのみならず、それは家康以來の和親外交の方針

を理解せざるものであり、更には家康より蒙つた恩恵（国家再造の恩）——家康の憐和の努力により明国駐屯軍の横暴が除かれ兵革の事が止んだ——にそむくものである。彼の猜疑恐怖を白石は幕初に於ける日鮮国交の回復に當つてとつた煮え切らない態度に認め、我方への遣使も結局は国情偵察を目的とする「間諜之使」（『國書復讐紀事』）といふべきものとまで極言する。一方我国からの使者に對してどういふ態度をとつたかと云へば、これを国都に入れる事を拒みつゞけ將軍秀忠の時（白石は徳廟、即ち秀忠の時とす、寛永六年の事で名義上はすでに家光の代となつて居る）僅かに入京を許した事があるのみで、それ以後は我方から使者を送らない結果となつた、とする。なほ信義なしとするのは我国に對してのみではなく明朝に對しても同様であつた事は、明清交代の際清に圧迫される明の国難に當つて救援の為に敢て一兵をも出さうとしなかつた態度にも見られるとし、「夫れ朝鮮狡黠詐多し、利の在る所信義を顧みず、蓋し叢貉の俗天性固より然り」（原漢文『國書復讐紀事』）と酷評を下して居る。

第二の復讐心については、白石はこれを李朝以前から存在する傳統的敵愾感情と思惟し、殊に文祿慶長の役に於いて苦難をなめた事によつてその感情が一層強められたとし、軍事的には到底拮抗出来ないから文事に於て復讐せんと常にその機会をねらつて居る状態で、これは幕初以来無智無識なる外交官が事に當つた為殘念ながら或程度果されて来た、と白石は考へる。国諱の問題で彼の正使と對立した時の白石の決意には異常なものがあつたが、それはかかる先入主に基くのであつて「我かねておもひ合せし事共あれば、我もまた死を誓ひて初のことばを改めず」（『折たく』）といふ激越なる口調を以て當時の心境を告白して居る。

第三の対清外交上に於ける日本利用とは、白石によれば朝鮮が清朝の属国となりきらないのはその背後に日本が存在するからである。明の滅亡後朝鮮が清太宗の侵略を蒙つて城下の誓をさせられ屈辱的条約を以て和を請はざるを得なかつた事（朝鮮のいはゆる丙子丁丑の虜乱）は周知の事であるが、それでもなほ且つ完全に属国となりきる事なく

自国の伝統文化を保持し自主性を失はないのは、畢竟、日本が背後に存在して無言の中に清朝を制圧して居る為である、白石の言を以てすれば「靈を我が東方に仮ることあるも亦知るべからざる也」(原稿文「江」)である。(三)この語は正使

趙泰億との私的会談の際に交はされたものであるが、白石がかかる言葉を吐くに至つたのはその頃朝鮮人某から、かういふ話——清の康熙帝がその王子を朝鮮へ養子にやらう(朝鮮から云へば讓国を意味する)と申出た時に、朝鮮側

では日本との約束(李氏の後の事は万世と云ふともかはるべからず)を楯にとつて婉曲にこれを拒まうとしたといふ事實、を聞き知つて居つたからの事である。(享保八年佐久。四)
(開洞嚴宛書簡)

以上の判断は白石が鮮使迎接の際に於てすでに抱懷せる所であつたが、その後彼国の書物『政事撮要』(五)を見る事によつていよく惡化し、『朝鮮聘使後議』(將軍家継への建白)に於ては朝鮮側の不信義を口を極めて非難するに至つて居る。

二 朝鮮との交際方針

前述の如き朝鮮觀は白石をして朝鮮との交際に当り 和[○]平・簡[○]素・對[○]等の三方針を立てしめる事となつたと思はれる。第一の和平は「累世の好、義として卒かに絶ち難し」(「國書復」)といふ態度がそれで、和親外交を以て家康以来の鉄則と白石は考へる。従つて將軍家宣の命をうけて鮮使に新しき待遇方針を伝達する際にも、「惟だ隣國の好、懷に在りて已まず」と前置して高麗朝以来の平和的關係と壬辰役後の家康の国交回復の努力とをあげその志の繼承を宣明して居る(「奉命教諭」)。家康の事業を絶対視しそれに規範を求める白石であり、又文治主義者白石でもあるからかかる態度は当然の事と解せられる。

第二の簡素は「祖宗の世、朝鮮來聘、なほ今の中山使者（琉球使節）の如し」（『國書後
（號記事）』）といふ認識から出て来るも

ので、これには名分上と財政上の考慮が最も強く作用して居る。殊に後者は切実な現実の問題であつた。即ち幕府自体に於いて聘使迎接に要する費用が大きかつた許りでなく——正徳以前に於ては大体百万両を要し正徳の際は六十万両に止まつたといふ（『近衛基
（號日記）』）——、諸大名や一般人民の負担も軽からず、その他種々煩瑣な事柄が附随した事がこの

簡素化を望ましめた第一の理由であらう。なほ白石の頭には過去の歴史に於ける不名誉なる事実が強く印象されて居つた。それは室町幕府の屈辱外交の先例——將軍義政の時明朝に銅錢十萬貫を請ふた事、或ひは嘉吉年間朝鮮の弔問使をことわつた事——で、それらは結局財政上の不如意が然らしめた事であるから、国家の運に盛衰のある事は天地の理であり従つて何時の世にも富強を維持する事が望み得ないとすれば、遠き将来を慮つて如何なる財政状態にあらうと費用に事欠かぬ様な待遇法を今日採用しておく必要があるといふのである。（この考に基いて白石は後に對馬での応待といふ案を將軍家継に提出した）。周知の通り三代家光までは幕府の財政は豊かで、従つて白石のいふ如く朝鮮使の応待にしても随分派手であつたのであるが、四代の頃から既に窮屈を感じ始め五代の時には元祿年間に貨幣改悪によつて漸く危機を切りぬけ得た事であるから、その後をうけた六代の宝永正徳の際は全く窮乏状態に陥つて居た訳である。一方名分上の理由といふのは鮮使の待遇が厚きにすぎる点を問題とするので、白石はそれが勅使の応待よりはるかに重く取扱はれて居る事を以て名分をみだるものとする。当時近衛家熙に書送つた手紙に於て「其使ヲ接待ノ礼、事の外に過キ候て、六十余州ノカラ用ヒ尽して送迎せられ、我天使ヲ待せられ候に百倍し、海陸の道駅ノ中朝昼夕の盛饌皆く七五三と申す事にて候」（正徳元年七月十六日附後出内
（藤博士論文附載のものに據る））と述べて居る（『折たく柴の記』にも同様の記事がある）。

第三の対等の方針は「之を奉ずるに旧法を以てし、之を考ふるに古礼を以てし、之を度るに二国を以てす」（『度之

以「二国」を釈して白石は「日本と朝鮮とつりあひをはかりて高下なきやうにす」と述べて居る（『奉命教諭（朝鮮使客）』）といふ言

葉がよくこれを示し、実際には復号・応接の儀礼・朝鮮王への書翰等にはつきり現れた。前述の通り復号問題は先賢の詳密に論議せられた所で改めて論ずるまでもないと思ふが、一言卑見を挟む事が許されるならば、これについて白石の最も考慮を払った点は我と朝鮮との国際的地位の優劣にあつたので、白石から見れば金地院崇伝や林羅山が朝鮮を一段下に見下し我方から国王の称号を用ひる事は却て彼と対等になつて了ふとする意見は我方の独善的空論にすぎないので、実際は大君といふ称号を用ひる事が我をして彼よりも一段下位に置かしめる結果となるのである。何となれば大君は朝鮮では臣下に授ける職号であるからである。（『経国大典』によれば王子の嫡子を大君といふ）従つて大君の文字を用ひることはそれですゝへ我方を輕蔑せんと欲して居る朝鮮側に益々優越感を抱かしめることになるといふ点に白石の危惧はかかつて居るわけである。崇伝や羅山達は朝鮮をいはば属国視する一方に、幕府を以て朝廷に代るもの、即ち天朝と見なす事によつて日鮮の外交關係が正常な形に置かれた様に判断して居るけれども、朝鮮側では我に對して対等感を抱いて居るのみならず幕府に對してはその上に天皇が位せられる事を承知して居るのであるから（この天皇將軍の關係は『海東諸国記』にも明記されて居り、又『通文館志』には復号に關聯して両者の關係を述べた注目すべき記事がある）、大君などといふ称号を新に採用し朝鮮が我方の要求通り「日本国大君」と記した国書を幕府に提出した事を以て賀すべしとした態度の如きは、白石から見れば誠に滑稽極まる姿であり又無識も甚しいものであつたのである。古來復号問題に於て白石を非難する人々は白石の佐幕主義を問題とするので、勿論この点は十分批判さるべきものを持つて居るけれども、当時幕府が實質的に主権を握つて居つた状態からすれば白石の執つた態度には相応の理由はあるのであり、その処置の是非は別としてここにも白石の国際的視野の広さが現はれて居る。

次に応接の儀礼を見れば、白石のいふ如く徳川創業以来朝鮮側の心を和げる意味からその待遇は厚きに過ぎ、応接の礼も過不及の所が数々あつた事はやむを得ないが、百年にして礼楽興るといふ古語があり今日は正にその機会に遭遇して居るのであるから、右引用した如き基準に拠つて正しい儀礼を定むべきであるとして、色々改める所があつた事は周知の通りである。全体として見れば従来より取扱ひの軽くなつた事の方が多い様であるけれども、例へば国書を正使が奉呈する事と改めたのに伴ひ今度は將軍自ら復書を手渡す事とした如きがあつて、その点は優遇として使節が本国への手紙の中に述べて居る所である。^(七)後述する如く儀礼の整備には一面使節優待といふ意味も含まれて居つたので必しも名分論と合理主義で割切つたものではなかつた。

書翰については、包装・書式・文字等に於いて細心の注意が払はれ、従来のものに変更を加へた所が二三あるが、それらはいづれも鮮使等の不満とした所であるけれども、この書翰の事から予想せざる大紛争をまき起したのが犯諱事件、即ち前述せる国諱論争であり、結局これは双方の譲歩によつて妥結を見たものの、朝鮮の廷議を沸騰せしめ又使節等にとつては不幸な結果を齎^(八)らしたものであつた。

三 使節待遇の眼目

前項で述べた所から演繹されて来る事柄であるから自然記述に重複を免かれないが、待遇の眼目は、(一)使節の勞はねぎらふ事、(二)過分の取扱は改める事、(三)徒らなる経費を節約する事、(四)鮮使をして我國の礼に従はしめる事、の四点にあつたかと思ふ。

(一)の使節の慰勞は、「近例外使進見の日、饗を賜ふのみ、今使客千里命を將^オなふ、一たび見へて事訖るときは、

則ち甚だ朝廷礼待の意に非ず(中略)饗を賜ふの日、樂を内殿に設けて之を宴樂せしめ」云々(『奉命教諭』)とて、進見・賜饗・辞見三儀中の賜饗に於て更に内殿の宴を設けた事によく現はれて居る。内宴に當つて白石と使節との間に小論争はあつたが、この事は使節等も十分優待たる事を認めたのである。

(二)の過度の優遇の是正は、既述の通り何よりも名分上の理由が大きいのであるが、その具体的に現れたものとしては、從來よく知られて居る様に、①前例は路次の国々に於て朝夕の膳七五三、昼の膳五五三であつたがその路宴は四所(大坂・京都・尾州・駿府)のみに限り他は食料を与へる事とす、②使節客館に入るに當つては從來乗輿のままであつたものを輿を下らしめる、③慰問の爲我方より遣した上使が客館に到る時には使節として送迎せしめる、④上使は今迄の執政を改めて高家のそれとす、⑤進見の儀の際には正使自ら国書を奉呈する事とす、⑥同じく進見の儀に於て使節の拝位が三家の座と同じであつたのを改める(高家並とす)、⑦賜饗の際の三家相伴の儀を改め領客使をして代らしめ使節の座位をも変更す、等が挙げられる。

(三)の冗費節約は先づ幕府自体の財政的見地より案出せられたものであるが、同時に諸大名にとつても一ヶの負担であり、一般人民にとつても大きな痛手であつた。大名が幕府から土木营造その他諸役を課せられた事はいふまでもないが、この鮮使來聘も亦輕からざる負担であつたのであり、又一般人民に於ても鮮使來朝に當つて物質并に勞力の徵發が行はれた上、これに便乗する役人の不当な誅求になやまされ、その他種々の煩ひも伴つたのである。更に云へば、すでに參觀交代の制度によつて街道附近は助郷役を課せられて苦しみ農村の疲弊は増進する傾向にあつたが、大名の行列より遙かに大がかりな鮮使の通行は(一行の人数は大抵四百人近くであつた)、而も粗末に取扱へないものでもあつたから沿道の民の物心両面に於ける煩ひは甚だしいものであつた訳で、これらは明敏なる爲政者の放置出来ぬ問題であつたと見られるのである。なほ路宴の如きは使節にとつて煩瑣の感があつたので、これを四所に限定した

事に對して、他の事では先例に異るとの理由で一々抗議した朝使が何等異議を唱へなかつたといふのである。

(四)の彼使節をして我方の礼に従はしめるといふのは、礼記曲礼の所説に従つたもので「礼は宜しきに従ふ、使は俗に従ふ」と云々「使従俗」を白石釈して云ふ「また人の国へ使にゆくものは其国に入りては其国の風俗にしたがふものなり」と(『奉命教諭 朝鮮使客』)といふ態度を以て使節にのぞんだのであるが、この場合白石は前述の如く朝鮮側の我方使節待遇の事例をもつぶさに調べて両者の間に不均衡を生じない建前で聘礼を定めたのであるから、これは必ずしも自

国本位の考へ方に出でたものとは云へない。白石には相手の体面や立場を重んずる氣持が多分にあつたと認められる。それは国諱論争の際によく現れた事であるが、朝鮮側で嚴重なる諱法を採用して居るならば我方としてもその要求を容れてやるべきであると將軍に進言して居り、又犯諱の文字を書改める爲に彼の国書が本国に送還されるといふ事態に立至つた事により使節が帰国後譴責を蒙る様な事になつては氣の毒だといふので、對馬の宗氏を通じて使節の過失に非る旨を十分に朝鮮側に通告せしめた如き思ひやりが見られるのである。然らば何故国諱論争に於てあくまで強硬な態度をとり遂に彼使節をして我要求に従はしめたかと云へば、既述の通り彼国の文事を以てする復讐の企圖を粉碎せんとするにあつたと見る他はない。

以上甚だ大摺みに正徳度に於ける朝鮮聘使待遇の問題をとらへ、その際これが企画と実行に當つて中心的役割を果した新井白石の判断や計画等に検討を加へ來つたのであるが、さすが博学達識の人だけに白石の該問題処理の方針は肯綮に當る所多いが、今立場をかへ朝鮮側に立つてこの問題を考へるならば、種々の点で白石の判断には誤りがあり無理があり多少我田引水の見解もあつたとしなければならぬ様である。それは結局白石の朝鮮觀と朝鮮側の日本觀との相違に歸せしめ得るであらうが、例へば前にあげた家康の朝鮮に与へた恩恵——国家再造の恩といふのは、確か

に一面朝鮮が明の駐屯軍の横暴に大いに苦んだ事は事実であるけれども、『宣祖実録』には数多くの徴証がある）、それならば我方の家康に対して依存の念を起したかと云へばさうではなく、家康を以て一種の奸雄と見なして居つた様で、やはり飽迄も明朝の庇護を受けんとし、明朝に対してこそ再造の恩を謝するといふ態度を示したのであり、これは壬辰の国難の際明派遣軍の司令官であつた邢介の為に生祠歌謠を設けしめた事実^(九)に於て知られ（その廟には「再造藩邦」の勅額をかかげしめたといふ）、殊に注意すべきは此の正徳の使節が来朝した年から遡る事僅か六年の宝永元年（彼国で云へば肅宗三十年、甲申の年）に王城内に報壇^(一〇)を設け、壬辰役の時の救国の皇帝神宗を祭つて再造の恩を謝したといふ事実がある事である。此の事實は朝鮮が侵略者清朝に対する敵愾感情をはつきり表明したもので、我日本に対してのものではないけれども、朝鮮が今は亡き明朝を追慕しその恩に報ひんとする意志を持ち続けた事を端的に示すものと云つてよいであらう。

又白石は朝鮮の日本に対する態度を信義なきものとするけれども、古来の日本と半島との關係を考へ李朝々鮮立国以後を考へても彼の日本畏怖は抜き難い伝統的心理であつた事、更に直接的には秀吉の侵略を蒙り又その後を承けた家康にしても外交折衝の上では和戦両様の態度を示した事、その他秀忠・家光の対朝鮮方針を見れば彼が我方に対して常に警戒を怠らなかつたといふ事には大に理由のあることであらう。大局的に見れば朝鮮は清朝の侵略を受けて以來特に鎖国主義の国策をとつたのであるから、右と併せて我に対して信をおき胸襟を開くといふ態度の如きは望み得なかつた訳である。他方明朝滅亡の際の信義なき態度も、確かにこれを一種の狡智に出づるものと見なし得やうが、又常に隸従を強ひられ存立を脅かされて来た弱小民族の自己保存の本能に従つたものと見る事も出来なくはなからう。^(一一)

又復讐心の問題は矢張り白石の思ひ過ぎではなからうか。^(一二) 右述べた所からも察せられる通り、朝鮮にとつては間も

なく日本に代つて清といふ強敵が現はれ、これに隸屬を強ひられたのであるから報復の念は転じて清朝にむかひ、事
実仁祖の次の孝宗の代には清への反撃、いはゆる北伐の企があつた位であり、大報壇設置の如きも同様の氣持から行
はれたものであつたと見られる。唯、彼が我国に対して恐怖猜疑の念と同時に侮蔑の感情を抱いて居つたことは事實
である。それは文化上の優越感から出て来るものであるが、それが使節來朝の際の態度に於てあらはれ我国の知識人
を刺戟した事は事實であるから、元祿の後をうけ文運大いに隆盛にむかひつあつた正徳の時に、白石が彼の傲慢を
挫かんと氣負立つた事にはまた十分の理由を認めてよいであらう。

右に挙げた所から考へれば白石の判断は自国本位に傾いて居るかの如くであるが、これは當時の日本人、鎖国政策
によつて國家意識の強くなつて居つた時代人の心理としてはやむをえない事で、さういふ獨善的な考へ方に陥り易い
時期に於いて白石が國際眼を具へ、又國際道德の觀念を有して居つた事にむしろ注目すべきものがあると思ふ。例へ
ば、當時國禁を犯して潜入したイタリヤ人宣教師ヂオバンニ・シドチ (Giovanni Battista Sidoti) (白石のいはゆ
るヨワン・シローテ) に対する白石の虚心坦懷なる態度——白石がシドチを豪傑の士として敬重し、地理歴史上の新
知識に熱心に耳を傾けた事は余りにも著名である、白石はシドチとの出会を以て「一生の奇會」として居る——、シ
ドチの処罰に當つては直ちに我國の刑法を適用する事の不当を説き寛大なる処置をとるべしと進言した(『西洋紀聞附錄』)白石
は誅戮を下策、拘禁を中策、呂宋島への送還を上策とし、上策を採用せらるべきを進言した。如きに國境を越へたひ
ろき人間觀が現はれて居る。或ひは又白石の建策によつて所謂海船互市の新例(我國の金銀流出防止の爲に実行した
長崎貿易の制限)が実施せられ、更に密貿易を防止する策として外商に許可証としての信牌を与へた事があるが、こ
れを犯して清商李韜士なる者が密航し來り虚偽の申立をしたのに対し、白石は断じてこれを許すべからず直ちに本國
に押還すべきを主張した事がある。その際ひとり我國の法に従はしめるのみならず外國人がその國の制禁を犯して來

るをも認むべきではないとした態度（「韜士ここに来りしは其本国の法を犯せし也、天下の悪は一つのみ」『折たく』の柴の記）の如きは、一種の国際的正義感を示すものと云つてよいであらう。

想ふに對外策に於て白石をして強硬たらしめるものがあつたとすれば、それは結局して当時の歴史的條件に帰着せしめるのが妥当であらう。その歴史的條件とは既述の通り鎖国政策によつて導かれた国家意識の昂揚である。而してかかる意識に加ふるに白石の場合には国家を代表する立場に置かれたのであるから、その物の考へ方が個人としては相当に余裕をもちえたにも拘らず、公的には異常な緊張を示す事になつて居ると見てよいであらう。更にもう一つの理由は、これも同じく歴史的條件と認めてよいと思ふが、朱子学の盛行である。朱子学が名分を重んずる學問である事はいふまでもない。この學問に鍛へられた白石は名だたる名分論者の一人である。名分尊重の態度は国内問題の處理に於ても現れた所であるが、まして對外的にはそれは一層尖鋭とならざるを得ない。然し乍ら、儒教の根本精神は忠恕にある。孔子を深く尊信する白石は正名と同時に仁を重んじ恕を重んじた。前述の朝鮮国并に朝鮮使節に對する思ひやりの心理は、その淵源を探るならば蓋しこの仁恕に求めらるべきであらう。而もそれが一方にひろく深き知見を伴つたのであるから、さきに一二挙げた如き國際人としての判断と態度とがとられた事と思ふ。白石は人も知る意志の人であり理智の人である。而して一面また情の人でもあつた。剛毅人を圧する風貌の中にまた温情の掬すべきあるを認め得ないとすれば、白石の全人格にふれたものと云へないのではなからうか。（昭和廿七年三月稿）

註

（一） 昨廿六年十一月、史学会大会の国史部会に於て「近世外交史の一齣——正徳度朝鮮信使來朝時に於ける國諱論争」なる題名の下に筆者は國諱論争の再検討を行つたが、こ

こで明かにしようとした事はこの犯諱をめぐる紛争が單純なる形式的礼法論争に止るものではなく、日鮮兩國文化の趨勢と當時の國際關係とを象徴的に反映せる事件であつた、とい

ふ事である。犯諱とは我方將軍から朝鮮國王へあてた復書に於て國王、第十一代中宗の諱の文字を使用した事をいふが、朝鮮使が自國に於ける諱法の嚴重なる事を理由に改書を要求したのに対し、白石は一、五世不諱が天下の通札なる事、二、彼我兩國に於て諱法の異なる事、三、朝鮮側の國書が現將軍の祖父家光の諱を犯せる事、の三点を挙げて反駁し、一度はその要求を拒否したが、結局朝鮮側より先づ書改めるといふ事で諒解が成り、激烈を極めた論争も妥結に達したのである。

(二) 再造の恩といふ言葉は、鮮使來朝から五年後の正徳六年に撰んで將軍家継に呈した『朝鮮聘使後議』に於て用ひた言葉ではあるが、表現は後になるとしてもかういふ考へ方は当初からあつたものと認めてよいと思ふ。これに先行する有名な『國書復号紀事』(いふまでもなく鮮使來朝の翌年に書かれたもの、但し本文には鮮使辞去後間もなく草して將軍に呈出した意見を収録して居る)には、慶長五年に對馬宗氏からの使者が始めて朝鮮の返事をえて歸つた事を記して「蓋是之時、彼亦既厭上國留屯將士驕傲尤甚、欲与我渝平、以紓其患也」と云ひ、明兵の横暴に苦しんで我國との和平を欲するに至つたと解釈すると共に、又「勝國之難(わが豊臣秀吉の征伐)李氏宗社、剪焉傾覆、会ニ國家創業之初、我速出令反彼靡倪、以紓其民、勤而撫之、使好復通、(中略)彼於本朝棄恩忘德、視無其耻、亦既如レ此、而況於隣

誼乎」といひ、家康が秀吉の死後直ちに軍隊を撤し和平を講じた恩徳に對して彼の態度が耻なきものである事を指摘して居る。これが後議になると「朝鮮の君臣も明の天子のために其厄難を援けられて其封内をば安堵しけれ共、明の兵猶其國に留り鎮めて其將士相驕り國人を凌轢せし事も我國の兵禍に大方かはる事もなかりしかば、いかにもして國人を蘇息せん事をおもひしに、東照宮御代をしろしめされて前代の非を改られし事共を伝聞、又朝鮮の男女我國の兵の為にとらはれしものとも還し遣はされし所前後三千人に及びければ、やがて兩國の和事なりて夫より此かた彼國東西の民兵革の事を相忘れし且既に百年に及たり、我國再造の恩においては彼國の君臣長く忘るべからざる所也」といふ風に明確な表現となつて居る。

因みに正徳來聘問題を取扱ふ場合の第一級の史料は『奉命教諭朝鮮使客』、『朝鮮信書の式の事』、『朝鮮信使議』、『國書復号紀事附録の書類』、『肅宗実録所取趙泰億の奏請文』、『江関筆談』等であるが、『國書復号紀事』本文も鮮使歸國後のものではあるけれども、來聘當時と大体同じ判断を白石が抱いて居つたと見てよいと思はれるのでかかる判定の下に本稿では『紀事』の文を引用した。

(三) 『江関筆談』は周知の通り白石と鮮使との筆談で、執筆者は正使趙泰億である。この白石の語は泰億が(筆談では平泉とある、泰億字を大年、号を謙斎、又は平泉といつた)

自国を以て独り中華文明を保存する礼儀の国と讚美したのに
応酬した言葉の一節で、白石は右の語の前に於て次の如く述
べて居る。「当今大清易代改物因其国俗創制天下、如
貴邦及琉球亦既北面稱藩、而二国所以得免髮左衽
者、大清果若周之以德而不以疆然否、抑二国……」。わ
が江戸時代初期の三国の關係を明かにしたものは、浦廉一
氏のすぐれた論考『明末清初の鮮満關係上に於ける日本の地
位』がある（史林十九の二・三）。この論考に於ては西紀十
六世紀末より十七世紀後半の約半世紀にわたる期間に於て朝
鮮が対滿關係上に於て如何に日本を利用したかを四つの受難
の場合について明かにし、結論として「されば日本は殆んど
自覚することなく半島の実質上に於ける独立性を保護するの
役割を演じたものと斷ず可く、又一面より之を觀れば半島側
外交の優秀と勝利とを示すものである」と云つて居られる。

(四) この話について内藤虎次郎博士は次の如き批判を下
して居られる。「……いくら調べてもこんな事はない。支那
の朝鮮との文書の往復は、今日はずきり分つて居り、殊に同
文彙考といふ本などに往復の公文書が集めてある。中には
時々朝鮮がいくらか日本を背景に使つておどしたり、何か企
てゝある事がばれると、日本に仮託したことは確かにあつた
が、そんな事に尾鰭がついて今のやうな噂が出来たものかと
思はれる。」（白石の一遺聞に就て、『先哲の學問』所収）

(五) 『後議』には『政事撮要』について「然るに前御代
（家宣）御他界の後に至り朝鮮の大学士崔鳴吉と申せし者の
其大臣と相議し國王に申て修め正し候政事撮要と申書を見候
に慶長以來彼國の使來りし事ども皆々其情形を偵探して明の
天子に奏聞せし由を記しき」と記して居る。而してこの書が
「東照宮の御事を始め奉りて御代々の御事みなく、倭酋を以
て稱し候ひき」と云つて、家康以下將軍を指して倭酋と稱し
たことを信義なく礼儀なき態度として非難して居るが、倭酋
の語はすでに『国書復身紀事』の中に引用せられた『朝鮮紀
年撮要』にも見えて居るから、この書によつて白石が倭酋の
語に初めて接したとは云ひ得ない。なほ紀年撮要の記事と現
存京城大学法文学部刊行の『攷事撮要』（奎章閣叢書第七）
のそれとを比較するにその文は大体一致する様であるが、異
名同書なるか否かは未だ判じ得ない。又『通文館志』卷六交隣
下通信使行の部分に「康熙壬戌。辛卯。己亥。皆遣使以上使臣」
とある『紀年』とは何をさすか不明であるが、或は『紀年撮
要』と何等か關係があるものか。ともに識者の御示教にま
つ。

(六) 『海東諸国記』の文といふのは、國王代序の終に
「（前略）義成死。又立其弟義政。即今所謂國王也。於其国
中不敢稱王。只称御所。所令文書称明教書。每歲元率
一大臣謁天皇。當時不與相接。国政及聘問隣国天皇皆
不與焉」（『異称日本伝』所収のものに拠る）とあるものが

それで、これは『致事撮要』にも引かれ白石も亦右そのままではないが『国書復号紀事』に引用して居る。

又『通文館志』の記事とは、国書式の日本国大君殿下の語の割注に見へるもので、「初称日本国王、崇禎丙子（わが寛永十三年）倭使平智友来請改称大君 康熙己丑（わが宝永六年）関白源家宣献地於倭皇為湯沐邑、倭皇悦之命復其王号」云々とある。復号実現の原因を家宣の朝廷への献地に求めたのは明かに誤解であるが、彼方の日本国家観を見る場合には注意さるべき文字であらう。

(七) 肅宗三十七年十二月甲申三十日の条、趙泰億が国書改送を奏請した手紙に見へる。

「今此三度接見、内庭張榮、親伝国書、別致酒饌及前後累度勞饗、皆出於各別優待之意、係是国王所新定儀節云云」（『肅宗実録』巻五〇）

——東京大学附属図書館所蔵本に拠る、以下同様。

(八) 朝鮮廷議沸騰の大体を云へば、改書賛成の方は、使節を信頼して「国体大為損辱許し改誠難矣、然使臣必詳知事情而有此改送之請、勢当許之矣」といひ、或は結局抗争出来ないとの見透しから「我無制彼之氣力、每事曲從至於此其貽辱如何、（中略）当勿許改送而終不能勝、不得已後許之則不如即許之為愈」といふのであり、之に對して反對論は、漸次弱を示す事を不利として「御諍所レ書

之書既伝之後、還後持来寧不為辱乎、事事如此漸漸示弱則前頭不知又有何許事端」と云ふ。結局反對論も尤もだが「但倭是天地間別種、意計一定絕罕改図、前頭恐有難処之矣」といふ意見が王を動かして改書の裁定が下つたのである。

趙泰億等は帰国後廷臣の弾劾にあひ辱国の罪を問はれ手きびしい非難を受けたが、国王の裁決によつて官爵の削奪に止まつた。『実録』には「上教以徐判事議正合予意並命削奪官爵門外黜送禁府又勘罪諸詔首訳定配堂上訳官徒配堂下則決杖」と見へる。（肅宗三十八年三月庚戌、『実録』巻五一）

(九) 明経略邢玠の為に生祠歌謠を設けしめた事は『宣祖実録』三十二年十二月庚辰の条に見へる（巻一〇七）。生祠堂は翌年成り九月癸亥に邢玠の画像が安置された。但しこの建祠が果して全く朝鮮側の自発的行為であつたかどうかには疑問がある。何となれば右庚辰の条は備辺司の啓として「軍門生祠歌謠事軍門既自言之」と記し、それが邢玠の要求に出たものたる事を示すからである。而してその後の記事「但為軍門設生祠歌謠則四路提督必欲并参其間或為或否則有激怒難処之事」云々によつて、この挙が四路の提督を刺戟し同様の要求が出はしないかと恐れた状況も知られる。九月癸亥画像奉安と同時に「再造藩邦」の四大字をかかげしめた事が、『朝鮮史』（第四編第十卷、朝鮮總督府刊）に記されて居るが、筆者は未だ原典を採り得て居ない。

(一〇) 肅宗三十年甲申九月癸丑(十六日)の条に左の如き記事がある。

「上日、神宗皇帝再造藩邦之恩、万世不可忘也、宣祖大王若当神皇昇遐之時、則豈不欲立廟、予意非偶然、而今大臣諸臣皆以設壇為是、此亦可少伸至誠、定以築壇春秋設祭」(『肅宗實錄』卷四〇)

壇は十二月に成つた(廿一日丙戌条)。翌三十一年正月に祭器の制が定められ、三月癸卯(九日)には肅宗親しく神宗を祭り王子百官之に従つた(『肅宗實錄』卷四一)。

(一一) 朝鮮の巧妙なる自己保存策は前掲浦廉一氏の論考に詳しいが、日本に対しては明・清を、明・清に対して日本を背景として夫々を牽制した狡猾については、また各国共にこれを認めて居つたので、明も通倭を懸念したことがあり、

清朝の如きも日鮮の貿易は従前通り承認したが、同時に日清直接の通交を意図した事が知られる。丙子丁丑の役に於て城下の誓をさせた太宗の勅諭に次の如き文字が見へる。

「(前略)日本貿易聽爾如旧、当導其使者来朝(中略)爾以既死之身朕與生存保全爾之宗社復還所獲、當念朕再造之恩、後日子孫毋違信義則邦国永存矣、朕見爾国狡詐反覆、故降茲詔諭」云々(『皇朝文獻通攷』卷二百九十三、四裔考一朝鮮)

(一二) 我国に対する復讐心が果して白石のいふ如く国家的方針であつたかどうかは現在の所筆者の判断を超へた事であるが、壬辰役後彼国識者の一部に復讐の実行を主張する強硬論者のあつたと思はれる事は、管見にふれた『再造藩邦志』(平山昞用晦甫著)等の如き之を示す。その序の冒頭に「此志以征倭志為源」と述べ、著述の目的を明かにして居る。